

平成27年3月19日

お客さま各位

## つるしんL O B O（早期景気観測）調査結果について

都留信用組合

都留信用組合（本店：富士吉田市 理事長：細田幸次）は「第16回早期景気観測調査」平成27年2月期の調査結果を公表いたします。

当組合では、創立時より築き上げた顧客との関わり「全店のネットワーク」を活用し、各営業部店が取引先企業から聴取した「肌で感じる足元の景況感」を迅速・的確に把握し、当組合の経営に係る今後の課題や直近の対応策の参考指標として早期景気観測調査を実施いたしました。

今後も、お客様の多様なニーズにお応えするとともに、「地域密着型金融」の推進を図ってまいります。

### 《 調査概要 》

#### 1. 調査対象期間と調査項目（第16回調査 平成27年2月期）

【質問1】（添付企業景況感調査結果項目別分析表及びD I 全合計集計値参照）

- ① 前期「平成26年8月～平成26年11期」と比較した「現在」の状況について
- ② 「現在」と比較した来期「平成27年4月～平成27年7月期」の見通しについて

【質問2】 現在に直面している経営上の問題点 上位3位まで

【質問3】 現在（今後）進めている（いく）経営改善対策 上位3位まで

【質問4】 その他（貴社の好不調の要因、経済動向並びに財政・金融政策等に関するご意見、「つるしん」に対する要望、その他）

※ 質問4については、各企業（事業主）の記述的な回答であり、回答の中には、繊細かつ個人情報的な部分が存在するため、公表を割愛させていただきます。

2. 調査対象企業（事業者）先数と業種  
 調査対象事業所等の選定については、業種・地域が極力平準化するよう本支店  
 22店舗に選定を依頼し、下記3分類にて全営業区域内の調査内容といたしました。

分類	業 種	先 数
1	サービス業関連（旅館業・ホテル業・飲食業・卸小売業）	33先
2	建設業・建築業関連	29先
3	製造業関連	33先
合 計		95先

3. 調査対象実施月 : 2月・6月・10月  
 平成22年2月を第1回とし、以後4ヶ月に1度のペースで実施する。

4. 調査形態  
 調査表「つるしん企業景況感調査票」による。（別添白地参照）

5. DI値について  
 全てが拡大で100%、全ての指標が悪化で0%となる。過半数の経済指標  
 が拡大あるいは改善を示せば、景気動向指数は多数決の原理で拡大・回復を示  
 す。  
 50%が景気回復（拡大）と悪化の判断の境目になる。前期比で伸び率ゼロ  
 となった指数があった場合は、景気拡大を示す経済指標を0.5個分として計  
 算する。  
 尚、DI値の山・谷は景気の時と谷とは一致せず、景気が山の時いずれもD  
 I値は50%となる。景気が良いか悪いかの判断はDI値の50%ラインが目  
 安となる。

【添付資料】

- ① 企業景況感調査結果項目別分析表 4ページ  
 ② DI値全合計集計（平成27年2月調査・平成26年10月調査）各1ページ  
 ③ 「つるしん企業景況感調査票（白地）」 1ページ

以上

本件に対するお問合せ先 都留信用組合 経営企画部 奥脇・渡辺 電話(ダイヤル) 0555-24-4803
--

平成27年2月25日集計  
都留信用組合  
経営企画部

企業景況感調査結果項目別分析表

	業 種	先 数
調査対象企業先	旅館業・ホテル業・サービス業・飲食業・卸・小売業	33先
	建設業・建築業関連	29先
	製造業関連	33先
合 計		95先

<質問1>：集計DI値に対する総評

前期と比較した今期の状況と、今期と比較した来期の見通しについて

※ ここで言う「前期」とは、平成26年8月～平成26年11月期

※ ここで言う「今期」とは、現 在

※ ここで言う「来期」とは、平成27年4月～平成27年7月期

イ・売上高	<p>今期の総合DI値は52.63%となり、前期総合DI値57.37%に対し4.74%後退したものの景況判断の境目である50%を2.63%上回った。</p> <p>業種別に見ると、サービス業関連はDI値が48.48%と前期DI値37.88%を10.6%上回った。そのうちホテル・旅館は、富士山世界遺産登録の効果もあって好調を維持している。卸・小売業や飲食業においては企業によって格差はあるが、売上が回復している企業が多くなり、DI値の大幅な改善に貢献した。</p> <p>建設業・建築業関連は、DI値が46.55%と前期DI値67.24%に比べ20.69%大幅に下回った。民間工事の減少や、人手不足などの事由による工事の効率低下などで売上が減少している企業が散見される。</p> <p>製造業関連においてはDI値が62.12%と前期DI値68.18%を6.06%下回ったが、DI値は高い水準を保っており総合DI値を押し上げている。多くの企業で受注が増加傾向にある。</p> <p>来期の見通しについては、総合DI値は64.74%と今期総合DI値を12.11%上回り、改善するとしている。</p> <p>サービス業関連においては、ゴールデンウエークや観光シーズンを控えて消費の拡大が見込む企業が多く、DI値は68.18%と今期に比べ</p>
-------	---

	<p>19.70 ㊦改善するとしている。</p> <p>建設業・建築業関連においては、今期に比べ来期以降は売上が回復するとみている企業が優勢で、D I 値は 53.45%と今期に比べ 6.90 ㊦改善するとしている。</p> <p>製造業関連においては、売上が増加またはやや増加するとみている企業が多く、D I 値は 71.21%と高い水準となり、総合D I 値を押し上げた。</p>
<p>ロ・売上単価</p>	<p>今期の総合D I 値は 47.89%となり、前期総合D I 値 50.53%に比べ 2.64 ㊦後退した。</p> <p>サービス業関連においては、食品卸売業やスーパーなどにおいて大型スーパーの出店が相次ぎ、競争激化により販売単価の低下を迫られるなど売上単価も減少傾向が続いているが、持ち直してD I 値は 48.48%と前期に比べ 3.03 ㊦改善した。</p> <p>建設業・建築業関連においては、D I 値が 50.00%となり前期D I 値に比べ 5.17 ㊦後退した。下請企業に受注金額が低下している企業が見られる。</p> <p>製造業関連においては、D I 値は 45.45%となり前期D I 値に比べ 6.07 ㊦下回った。売上は増加傾向にあるが、一方で受注単価が低下している企業が見られる。</p> <p>来期の見通しは総合D I 値 57.89%となり、売上単価は今期に比べ 10.00 ㊦上昇するとしている。</p>
<p>ハ・資金繰り</p>	<p>今期の総合D I 値は 51.05%となり、前期の総合D I 値 53.68%に比べ 2.63 ㊦後退したが、資金繰りの好転・悪化判断の境目となる 50%を上回った。前期に比べ売上高が減少したことや、サービス業、製造業関連では原材料の高騰が収益を圧迫し資金繰りが悪化している企業があるなど、前期D I 値を下回る結果となった。</p> <p>来期の見通しは総合D I 値が 52.63%となり、資金繰りは今期より僅かに改善するとしている。</p>
<p>ニ・借入難度</p>	<p>今期の総合D I 値は 47.37%となり、前期の総合D I 値に比べ殆ど変化はなかった。業種別に前期と比較すると、サービス業関連=1.51 ㊦プラス、建設業・建築業関連=5.17 ㊦マイナス、製造業関連=1.52 ㊦プラスとなった。建設業・建築業関連は売上高D I 値が大幅に後退しており、借入難度D I 値にも反映する形となった。</p> <p>来期の見通しにおいては、総合D I 値 51.05%と今期に比べやや改善すると見ている。</p>

ホ・収益状況	<p>今期の総合D I 値は 53.16%となり、前期の総合D I 値 58.42%に比べ 5.26 ㊦後退したが、収益状況の好転・悪化判断の境目となる 50%を上回った。</p> <p>業種別に見ると、製造業関連は売上高D I 値が改善している一方で、円安などで原材料費が高騰し収益を圧迫している企業が見られ、今期のD I 値は 51.52%と前期D I 値 65.15%を 13.63 ㊦下回った。建設業・建築業関連は売上高D I 値が大幅に悪化したのを反映し、収益状況D I 値は 55.17%となり、前期D I 値を大幅に下回った。一方でサービス業関連は売上高D I 値の大幅な改善を受け、収益状況D I 値も 53.03%と前期に比べ 7.58 ㊦改善した。</p> <p>来期の見通しにおいては、総合D I 値は 57.37%と今期総合D I 値に比べ 4.21 ㊦改善するとしている。特にサービス業関連においては、ゴールデンウエークや観光シーズンを控えて消費の拡大が見込める企業が多く、収益状況はさらに改善すると見通している。</p>
ヘ・雇用状況	<p>雇用状況の総合D I 値は 56.32%とやや不足としている。50%が雇用状況の境目となるが、その中で建設業・建築業関連は 62.07%と人手不足は顕著になっている。また、製造業関連においては受注状況の改善に伴い、人手が不足傾向にある。</p> <p>来期の見通しは総合D I 値が 57.37%と今期に引き続き雇用状況はやや不足するとしている。特に建設業・建築業関連、製造業関連において雇用は厳しい状況が継続するとしている。</p>
ト・自社の業況判断	<p>今期の総合D I 値は 49.47%となり、自社の業況判断の境目となる 50.00%を僅かに下回った。その中で建設業・建築業関連は、売上高D I 値が大幅に悪化したことを反映し、D I 値は境目となる 50.00%を大きく割り込んだ。一方で、製造業関連においては売上高D I 値が高い水準にあることを反映し、自社の業況判断D I 値は 59.09%となり、総合D I 値を押し上げた。</p> <p>来期の見通しにおいては、総合D I 値は 57.89%と今期に比べ 8.42 ㊦改善するとしている。また、全業種において判断の境目となる 50.00%を上回り、来期への期待感が窺える。</p>
チ・自社の身の回りの業況判断	<p>今期の総合D I 値は 43.68%と身の回りの業況判断は自社に比べ低下していると判断している。本項目は毎回の調査において、非常に低い数値で推移してきている。要因は上記「イ～ト」の項目にて明らかであるが傾向としては、今回も上記「ト. 自社の業況判断総合D I 値 49.47%」を考慮すると、各企業が「自社（自身）の業況」より「他社（身の回り）」</p>

	<p>の業況」は悪いとの見方が強い。</p> <p>来期の見通しにおいても、上記「ト. 自社の業況判断（来期の見通し）総合D I 値を 57.89%と予想しているにも拘らず、他社（身の回り）の業況判断は総合D I 値 48.42%と 9.47 ㊦の乖離結果となった。他社（身の回り）を自社（自身）より厳しい状況と判断することで、安堵感を求めている状況も窺える。</p>
--	--

<質問2回答>：今期直面している経営上の問題点上位3位

順位	回答
第1位	仕入単価の上昇（商品・原材料等）
第2位	同業者間による競争の激化
第3位	消費・需要の停滞（民間・公官庁）

<質問3回答>：貴社が現在（今後）進めている（いく）経営改善対策上位3位

順位	回答
第1位	売上高増加（販売高・製品出荷高・完成工事高・請負工事高）策
第2位	利益率向上策
第3位	経費削減策

以上

## 【DI全合計集計値】

(平成27年2月末調査)  
都留信用組合 経営企画部

- ① 前期比:「26年8月～26年11月期」と比較した「現在」の状況のDI値  
② 来期見通し:「現在」と比較した「27年4月～27年7月期」の見通しのDI値

イ. 売上高			
	前期比	来期見通し	
総合	52.63%	64.74%	↑
サービス業	48.48%	68.18%	↑
建設業関係	46.55%	53.45%	↑
製造業	62.12%	71.21%	↑

ロ. 売上単価			
	前期比	来期見通し	
総合	47.89%	57.89%	↑
サービス業	48.48%	60.61%	↑
建設業関係	50.00%	51.72%	↑
製造業	45.45%	60.61%	↑

ハ. 資金繰り			
	前期比	来期見通し	
総合	51.05%	52.63%	↑
サービス業	51.52%	53.03%	↑
建設業関係	50.00%	53.45%	↑
製造業	51.52%	51.52%	⇒

ニ. 借入難度			
	前期比	来期見通し	
総合	47.37%	51.05%	↑
サービス業	48.48%	48.48%	⇒
建設業関係	46.55%	53.45%	↑
製造業	46.97%	51.52%	↑

ホ. 収益状況			
	前期比	来期見通し	
総合	53.16%	57.37%	↑
サービス業	53.03%	59.09%	↑
建設業関係	55.17%	53.45%	↓
製造業	51.52%	59.09%	↑

ヘ. 雇用状況			
	前期比	来期見通し	
総合	56.32%	57.37%	↑
サービス業	50.00%	51.52%	↑
建設業関係	62.07%	65.52%	↑
製造業	57.58%	56.06%	↓

ト. 自社の業況判断			
	前期比	来期見通し	
総合	49.47%	57.89%	↑
サービス業	43.94%	54.55%	↑
建設業関係	44.83%	55.17%	↑
製造業	59.09%	63.64%	↑

チ. 自社の身の回りの業況判断			
	前期比	来期見通し	
総合	43.68%	48.42%	↑
サービス業	33.33%	46.97%	↑
建設業関係	48.28%	50.00%	↑
製造業	50.00%	48.48%	↓

※DI(デフレーション・インデックス)の算式

$$DI = (\text{拡張指標数 (1. 2)} + \text{持合指標数 (3)} \times 0.5) \div \text{採用指標数} \times 100\%$$

※DIについて

DIとは指数に採用している経済指標のうちで景気の拡大を示している指標の割合を示したものの。全ての経済指数が拡大すれば100%となり、全ての経済指数が悪化すれば0%となる。過半数の経済指標が拡大あるいは改善を示せば、景気動向指数は多数決の原理で拡大・回復を示唆していると考えられるので、50%が景気回復(拡大)と悪化の判断の境目となる。

## 【DI全合計集計値】

(平成26年10月末調査)  
都留信用組合 経営企画部

- ① 前期比:「26年4月～26年7月期」と比較した「現在」の状況のDI値  
② 来期見通し:「現在」と比較した「26年12月～27年3月期」の見通しのDI値

イ. 売上高			
	前期比	来期見通し	
総合	57.37%	61.05%	↑
サービス業	37.88%	51.52%	↑
建設業関係	67.24%	56.90%	↓
製造業	68.18%	74.24%	↑

ロ. 売上単価			
	前期比	来期見通し	
総合	50.53%	55.26%	↑
サービス業	45.45%	51.52%	↑
建設業関係	55.17%	56.90%	↑
製造業	51.52%	57.58%	↑

ハ. 資金繰り			
	前期比	来期見通し	
総合	53.68%	54.74%	↑
サービス業	46.97%	51.52%	↑
建設業関係	60.34%	55.17%	↓
製造業	54.55%	57.58%	↑

ニ. 借入難度			
	前期比	来期見通し	
総合	47.89%	51.05%	↑
サービス業	46.97%	46.97%	⇒
建設業関係	51.72%	56.90%	↑
製造業	45.45%	50.00%	↑

ホ. 収益状況			
	前期比	来期見通し	
総合	58.42%	58.95%	↑
サービス業	45.45%	57.58%	↑
建設業関係	65.52%	53.45%	↓
製造業	65.15%	65.15%	⇒

ヘ. 雇用状況			
	前期比	来期見通し	
総合	56.32%	55.26%	↓
サービス業	54.55%	50.00%	↓
建設業関係	60.34%	56.90%	↓
製造業	54.55%	59.09%	↑

ト. 自社の業況判断			
	前期比	来期見通し	
総合	53.68%	54.74%	↑
サービス業	43.94%	51.52%	↑
建設業関係	55.17%	55.17%	⇒
製造業	62.12%	57.58%	↓

チ. 自社の身の回りの業況判断			
	前期比	来期見通し	
総合	43.68%	47.37%	↑
サービス業	37.88%	50.00%	↑
建設業関係	50.00%	48.28%	↓
製造業	43.94%	43.94%	⇒

※DI(デフレーション・インデックス)の算式

$$DI = (\text{拡張指標数 (1. 2)} + \text{持合指標数 (3)} \times 0.5) \div \text{採用指標数} \times 100\%$$

※DIについて

DIとは指数に採用している経済指標のうちで景気の拡大を示している指標の割合を示したものの。全ての経済指数が拡大すれば100%となり、全ての経済指数が悪化すれば0%となる。過半数の経済指標が拡大あるいは改善を示せば、景気動向指数は多数決の原理で拡大・回復を示唆していると考えられるので、50%が景気回復(拡大)と悪化の判断の境目となる。

つるしん企業景況感調査票

(現在)

事業所名		従業員数		記入日	
業種		年商(直近)		TEL	

<質問1>①前期(26年8~11月期)と比較した現在の状況と、②現在と比較した来期(27年4~7月期)の見通しについてお尋ねします。  
該当する番号に○印をお付けください。

項目	期間	現在の状況				来期の見通し					
		①前期(26年8~11月期)と比較した				②現在と比べた来期(27年4~7月期)					
イ. 売上高(完成工事高・請負工事高等)		1. 増加	2. やや増加	3. 不変	4. やや減少	5. 減少	1. 増加	2. やや増加	3. 不変	4. やや減少	5. 減少
ロ. 売上単価(商品・加工・受注単価等)		1. 上昇	2. やや上昇	3. 不変	4. やや低下	5. 低下	1. 上昇	2. やや上昇	3. 不変	4. やや低下	5. 低下
ハ. 資金繰り		1. 好転	2. やや好転	3. 不変	4. やや悪化	5. 悪化	1. 好転	2. やや好転	3. 不変	4. やや悪化	5. 悪化
ニ. 借入難度(含手形割引)		1. 容易	2. やや容易	3. 不変	4. やや困難	5. 困難	1. 容易	2. やや容易	3. 不変	4. やや困難	5. 困難
ホ. 収益状況(経常利益)		1. 好転	2. やや好転	3. 不変	4. やや悪化	5. 悪化	1. 好転	2. やや好転	3. 不変	4. やや悪化	5. 悪化
ヘ. 雇用状況(人員=人手)		1. 不足	2. やや不足	3. 適正	4. やや過剰	5. 過剰	1. 不足	2. やや不足	3. 適正	4. やや過剰	5. 過剰
ト. 貴社の業況判断		1. 上昇	2. やや上昇	3. 不変	4. やや低下	5. 低下	1. 上昇	2. やや上昇	3. 不変	4. やや低下	5. 低下
チ. 貴社の身の回りの業況判断(地域近隣)		1. 上昇	2. やや上昇	3. 不変	4. やや低下	5. 低下	1. 上昇	2. やや上昇	3. 不変	4. やや低下	5. 低下

<質問2>現在直面している経営上の問題点について、重要度の高い順に該当する番号を回答欄へ記入してください。

01 大手企業・大型店の進出による競争の激化	11 過剰労働力(過剰人員=人余り感)	21 事業資金の借入難
02 同業者の進出・新規参入者の増加	12 従業員不足・確保難(人員不足)	22 新分野開拓・新規事業の開業
03 同業者間による競争の激化	13 熟練技術者の確保(団塊の世代大量退職)	23 売上高の減少(売上が増えない)
04 店舗・倉庫・工場等の老朽化または手狭	14 下請単価の低下(貴社が下請の場合)	24 合理化が進まない
05 在庫(製品・商品等)の過剰	15 下請単価の上昇(貴社が元請の場合)	25 利益率の好転が図れない(上がらない)
06 人件費等経費の増加	16 下請業者の確保難	26 原材料不足
07 販売単価(製品・商品)、受注単価の低下	17 生産設備の不足・老朽化	27 資金繰りの悪化(困難)
08 仕入単価の上昇(商品・原材料等)	18 生産設備の過剰	28 その他
09 消費・需要の停滞(民間・公官庁)	19 取引条件の悪化(代金回収の悪化・長期化)	具体的に・・・
10 消費者(ユーザー)のニーズの変化	20 金利負担の増加	( )

回答欄	1 位		2 位		3 位	
-----	-----	--	-----	--	-----	--

<質問3>貴社が現在(今後)進めている(いく)経営改善対策について、重要なものから順に該当する番号を解答欄へご記入下さい。

01 売上高増加(販売高、製品出荷高、完成工事高、請負工事高)策	09 在庫調整策
02 販売単価上昇策	10 仕入単価圧縮策
03 市場競争力増加策	11 人材教育策
04 適正な生産(販売)設備投資(設備配置)策	12 広告宣伝強化策
05 適性人員確保策(雇用、整理)	13 新商品、新製品開発
06 経費削減策	14 新分野・新事業展開策
07 資金繰り円滑化策	15 その他 具体的に・・・
08 利益率向上策	( )

回答欄	1 位		2 位		3 位	
-----	-----	--	-----	--	-----	--

<質問4>その他(貴社の好不調の要因、経済動向並びに財政・金融政策等に関するご意見、「つるしん」に対する要望、その他)


ご協力ありがとうございました。

組合 使用 欄	部店長印	担当印